男女共習体育授業の機能に関する一考察

－教師の捉えと学習者の認識を視点として－

中條　愛未　（　東京学芸大学　）

１．目的

本研究では，教師および学習者が男女共習体育をどのように認識しているのかを調査し，男女共習体育がもつ機能について検討することを目的とした．

２．研究方法

本研究では①教師と②学習者のそれぞれに対して調査を行った．①では，男女共習体育に対する捉えの一般的傾向を整理した．②では，共習を経験したことのない学習者を対象に体つくり運動（全６時間）を実施し，授業実践前後での質問紙調査から認識の変容について検討するとともに，認識の内実に迫るため実際の学びの様子を撮影したビデオを用いて考察を行った．

1）対象者　①中学校保健体育科教師（93 名）
　　②中学校１年生（111 名）
2）調査方法 ①質問紙調査
　　②質問紙調査とビデオ観察法
3）分析方法
①因子分析（IBM SPSS Statistics29 を使用）
　記述分析（類似する記述内容をカテゴリーとして生成）
②実践前後での平均値の比較と授業実践のビデオ観察

３．結果と考察

教師と学習者が共通して認識している機能には「多様な視点の獲得」「学習集団としての高まり」「良好な人間関係の構築」の３つの効果的な機能と「性意識による活動の制限」の負の機能があった．それらは，①では指導観や共習の指導経験によって，②では実践前後で認識に軽重がみられた．

1）男女共習体育に対する教師の捉え

４つの機能のうち「多様な視点の獲得」と「人間関係の構築」は，授業で作戦や戦術を重視する教師ほど強く認識しており，「性意識による活動の制限」では技能の向上を重視する教師ほど強く認識していた．さらに，共習の指導経験年数が長い教師ほど「学習集団としての高まり」を強く認識していた．

2）男女共習体育に対する学習者の認識

男女共習体育を通じて学習者は「多様な視点の獲得」を強く認識していき，「性意識による活動の制限」に対する認識は低下していった．

3）男女共習体育がもつ機能の構造化

ビデオ観察の結果，４つの機能の起点となるものは「学び合い」であり，その内実が本実践のように男女間の技能差を前提としない内容である場合，学習者同士の関係は「異性」としての他者から，１人１人の「学び手」としての他者へと変容していくことが示唆された．一方で，男女差を前提とするような種目や内容を扱う場合には，「異性」としての存在が強くなり，「性意識による活動の制限」に繋がってしまうといえる（図 1）．

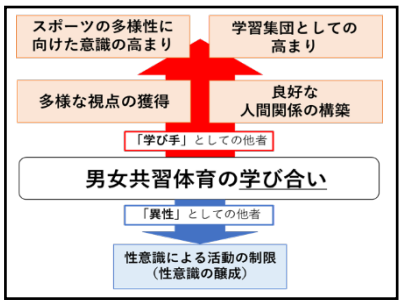

図 1 男女共習体育の機能に関する概念図

４．結論

本研究より，男女共習体育がもつ様々な機能は教師の指導観や学び合いの内実によって活かされ方が異なるため，「どのようにして男女共習体育に移行するか」というフレームありきの考えではなく，「体育科で何を学ぶのか」という視点から男女共習体育の機能について吟味し，実践をしていくことが重要になるといえるだろう．

５．主な参考文献

・山西哲也(2010)男女共習体育授業の実現の可能性と問題．教育学研究ジャーナル，6:61-68.